中村俊定文庫
文庫 18
560

宮城縣図書館

春秋稿初篇　坤ノ巻　二十五丁‖廿七丁

春秋庵に　志ら雄

うつるの日

春毎の野にのみ見しをつぼすみれ

はこぶ井水にうめの花ちる　栄路

朝霞こゝろしの御鷹けしきして　巨計

山のなたれの城ほのかなり　木鶏

月はとく影こゝゝとに竹の露　氏君

もくに陪して零餘子こぼるゝ　看之

中村俊定文庫

No. 1

かはる漱の沓戸に船よふ秋の聲　大束

湯殿行者のうすらさにける　大蹠

とのくもり心をいれて啼からす　千鳥

陣あはせにあはぬ恋して　山暉

たもひわび風の木の葉に歌かゝん　路

月そさえきる朝食の聲　雄

箙してはしるは衛士のたくひかや　方舟？

たもひまろけぬ雨篠にふる　如見

杜鵑あはれ野上の里とまり　乙通

変ひきかゝるつまの手まはし　風和

(大東京交易チエーン特製)

日さしよきいなりの宮の花咲て　いはく

角くむかすに浦のはゆふ　計

いかの墨道に艸鞋の塗るへく　鷄

伽衆ゆりらけて先山を見ん　君

松柏觀音堂も晴やかに　之

坐をかえてくむ朝のさかもり　末

うへのきぬ舞子にきせて天津風　蹠

花けしはし匂こほるゝ　齊

わすれ井ま釣瓶のなきそうらみなる　烏

かなたこなたに家はあれとも　暉

雲行の暴風催す月くれて　見
流人住なるふなはたの家　く
ひね米の白粥寒み雁の聲　雄
朝かほのれて日影またるい　路
神も今朝しくれのひまを旅衣　計
恵ほしたしなむ須磨の関守　鶏
やふれてハ葺かさねたるはま庇　君
崔のあゆこほう間ゆなり　蹠
かたる日や遠近の花匂ふかと　来
よかせてあそぶはるの　かせ

執筆

（大東京文具チエーン特製）

春秋稿二編　　坤之巻巻頭ニ出ツ

芭蕉翁正當日

去來あり丈艸あり其角は伊賀山の
あらしをうらふ荒雲の旅行にハ
不二をたに得ぬさらしとすへあまんの
門葉聲をあゆ声を香のなしみを
なにゆの世の節のるはごめてんか

ありもふにむかし今日今り

このはかすの故人をおもふしくれ哉　白雄
ふてにかはけるふゆの庶　看之
はま崔漬揪にやあそふらん　花耕
つりの翁のほのかなる月　冠戎

新殿のけしきを霧のをりそめて　坎君

車塵の秋水うけ過しつる　百歩

ゆら〳〵と梢は眞栄の薄もみち　木鶏

篤抱こむ篤つくりが妻　雄

放つ矢の矢はつこほれて物おもひ　之

霜の斂もうち折てるき　文卿

夕日さす荊棘かくれのやふ柑子　大來

ひさしき代すり兎原住よ　栄路

旅車小川に轍うちひたし　雄

はら〳〵あふきほたるかりする　耕

（大東京交真チエーン特製）

すんすりと麻きぬ白ふ月くれて　君

藥ほとこす岐曽の山あい　戎

あやにちる花の花に洒薄く　心

わかめ貝子のはる寒さかな　鶏

陽炎やくしらの骨のうちしらけ　歩

髮そりすてし朝をかしさ　来

あたらしきあはせに鍋の炭つけて　路

陣の亭主ほとゝきす待　之

下蔭が茂にゆかりのかた便　耕

鐘遥〳〵にてる日陰日の　君

月落て又引かゝる古ふすま　戎

賊がなさけの琵琶を返せり　雄

世の中い佛もさらに鬼もなく　来

松はらゆゆはまつ風のふく　心

馬かたむ恵すと聞は哀にて　歩

墓にまさこむつゆのあら櫛　耕

さつき川軍ハニ漱へたちける　雄

柱をけつる夜半の蚊火稔　戎

ひとくたり破れはかまをかけ竿に　之

出羽の最上のたすり待らん　心

（大東京文具チエーン特製）

遠近やいつれらなくこゝの花　来

杉笠白ふはるの日あもて　執筆

春秋稿二編（乾之巻巻頭）一丁三行表まで

初會肱起
誹諧之歌仙

春もやゝけしきといなふ月と梅　芭蕉翁

うくひす寂こさ篠のひとむら　白雄

雪解水まさかり鍛ふ山間に　炊君

ひしこなますものとかなりけり　采路

蝶飛て心にかろき旅竹乾　木鶏

牛しつかなる榛の木かくれ　看之

梓よる家はわつかにうち傾き　大来

むかしをしのぶ淡かはりて　如貞

霜けふり海人のたきさし旬ひなく　花耕

あか葉の杉に寒き日のかけ　百歩

宮木ひく地すりの車みつ輪にて　雄

角力のうらみ酒しぬてけり　君

津のゐや何内をへたつ水の月　路

鳴突牛にあふらひく宿　鶏

雑炊に箸うつ姫のたろ〳〵と　之

みそれけあかる諏訪のきさらき　千鳥

（大東京文具チエーン特賞）

花いまた庚みなつのをりたいきて　大鷺

ふつと食つく蕗のにかきよ　雄

つもる夜のかさねに（そ）あつき枕帝　君

なかたちそめし辻の観音　来

涼しやとむすひたれたる藤かつら　鳥

御園の瓜に酒ひやすころ　之

一ならぬ人のこゝろもおもしろく　歩

とすりさためぬ涯のうす雪　鷺

鐘なつて鼓鳴て噪くむらちとり　見

軍功者のくりひきにひく　耕

すゐ墨の白ひ恥さる捨あふぎ　雄

野をなつかしみむしろかる月　鶏

手児かうつきぬたをへたつ藪ひとへ　鷺

ふるき荷鞍に羽うつ梟　耒

行先に起つこけつの佐倍の神　之

あらしのたもと山たちしなく　歩

あとしまふ聖を夢に二夜見て　耕

喟ことに雪あやをなす　歩

臭鳥も木の女とさゝぬ磯の花　耒

海松やもつくに酢味曾かきけり　執筆

（大東京交員チエーン特製）

（春秋稿　四篇　下巻）

秋日の閑をとふものハ虎杖巷のあるしに

なゝ日数とゝめて一派の判者たるべき

事をそれ鈴も鈍も生贄也たゞとし

ころ訓に四季全なるを氏日　蕉翁の

像前にうつたふとて

ことゝに我もしらすよ秋の艸　白雄

かきりあくぬを　霧の三日月　古惟

狩くらす小鹿の角にしるしゝて　春鴻

はつす笠の道をなかるゝ　吳水
やきものに藥のまはる夏籠なり　紫居
柊のはなを繪にうつしとり　斜月
詩やらかおもひふるせゝ家哭事　臣計
つま驚る夜のあらしや　大来
けしからねはつ杜鵑啼かはす　氏君
石動こゆる馬のほくゝ　千鳥
わすれねハ松に向ても父恋し　洗こ
含むはかりの佛たうとむ　象狐
小帛紗に我名を縫て秋の月　昆明

(大東京交易チエーン特製)

落るをかそふ半部の露　河連
引すてし宮木かくれのいしたゝき　古愼
伊勢路の乞食　朝ハ抑むる　白雄
花に身の欲をしる時風たちて　吳水
茄子苗ふせし菴のいりロ　春鳴
陽炎にむせひ音を啼罠の鳥　斜月
てる日のかゝみ　芥ひつかけ　紫居
礒まくら住すゝむもものおそひ　大来
佐師かなゞ恋しれるかな　臣計
うら表雨の葛葉のしけり　あひ　千鳥

蛇うつゆふべ露のをりたる　代居

猿蓑か宿に陽を焚秋の風　我脱

紅葉のうるみ月蝕になむ　昆明

身に纏ふ夜の羽織ハ袷にて　何進

棺をまもるうたかたのゆめ　迄こ

世の中や折たる弓にはなしあり　白雄

人もものいへば石のこたふる　古慊

霜白き志賀のほそ道水かれて　春鳴

蔓に蹴のみたれたはぬる　吳水

こしかたをおもひ足やふるかた屋　蜜居

(大東京文具チエーン特製)

舟をほとく　船のきぬ　鈍月

百里来て百里をかへる人の花　巨計

霞こめたるやまのりたゞき　執筆

No.

(大東京文具チエーン特製)